

福井県文書館講演

豪農一家にとっての近代－杉田仙十郎と定一夫妻－

家近 良樹*

はじめに

1. 仙十郎・定一・鈴の軌跡
2. 父仙十郎と妻鈴
3. 新島夫妻とのかかわり

はじめに

こんにちは、家近です。今日はこういうテーマでお話することになり、先ほど杉田定一研究の第一人者と紹介されましたが、実は私は全くの門外漢です。ただ、私の勤め先の大学に杉田定一に関する文書が大量にありまして、11年前にこれを調査するようにとの、いわば命令があって、それから、少しずつ調査と研究をやってきました。その結果、こういうかたちで講演をする機会が与えられたので、お話しさせていただきます。とにかく私は第一人者ではありません。その点はお断りしておいたほうがいいと思います。

もう一ついいますと、だんだんやっているうちに、申し訳ないですが、杉田定一さんよりも、定一さんの父親である仙十郎さん、それから奥さんの鈴さん、このお二人の方がむしろ魅力がある、そういう気持ちが出てきたんですね。現在文書館では、鈴の書簡が展示されています。これは素晴らしいものです。およそ女性とは思えないくらい雄々しい筆致です。それに心惹かれました。そういう点で、杉田鈴の書簡が、私が杉田定一一家に取り組む大きなきっかけになっています。

それから、もう一つリクエストが文書館の方からありまして、今年NHK大河ドラマの主人公が新島八重なので、八重のこともしゃべってくれといわれています。それで1か所だけ、強引ですが八重と鈴が関係した話をします。ただ、拡大解釈はしません。なぜかといえば、「こう思う」という話は面白くないんですよね。いつも作家には嫌われるのですが、彼らと我々のどこが違うのかといたら、作家は自由に想像力をかきたてて話ができるんです。我々にはものすごく決定的な制約があり、それが資料の存在なのです。資料がないことに関しては絶対しゃべれない。そういう点で制約はありますが、その中で自分が知りえた資料、少ない資料ですが、その中からこういうことがいえるのではないかとこのことを話そうと思います。

それから、資料の話が出てきたので触れますが、この歳になって恥ずかしい話ですけど、だんだんわかってくることがあります。それは、面白い資料を見ている時が一番幸せだということです。こ

*大阪経済大学経済学部教授

これは、ちょっと他の方にはわからないと思いますね。いろんなことを想像させてくれる資料を見ている時が、私には一番の幸せな時です。ただ、つくづく思うのは、その資料を正確に読めるかどうかということ。これが、この歳になっても大きな課題としてあります。というのは、資料があると、その資料を面白く使おうとする気持ちが自然と出てくるのです。どなたもそうだと思いますが、自分がやっていることを面白く見せたいという気持ちがあるものです。ところが、だんだんそういうことが、許しがたいというか、つまらないことじゃないかと思うようになりました。そして、資料を素直に正確に読み解いていく、そこから出てくるものが一番大事だというふうを考えるようになりました。

つい何日前ですけど、NHKのFMラジオを聞いていた時に、京都のある音楽大学のロシア人の女性教師の話の中に、わが意を得たりと感じたことがありました。彼女はピアニストで、たとえばショパンの曲をすでに暗譜しているんですね。ところが、その彼女が、こういうことをいわれたのです。やっぱり楽譜通りに弾かないといけないと。なぜかといいましたら、知らず識らずに弾いていたらしいんですね、ピアノを。ハッと気がついてもう1回戻って見たら、楽譜に書かれていたことと違う解釈で弾いていたらしいですね。もちろん楽譜には、作曲した人の思いがあるわけですから。それを暗譜とかたちで知らず識らずのうちに、自分の解釈とか自分の思いで弾いていて、「ああ、これは良くないな」と思い、それから彼女はどんな演奏会でも必ず楽譜を置いて弾いているらしいです。

この話を聞いて、やっぱり資料も同じだと思います。その資料がどういうものを伝えようとしているのかということ、きちんと把握してやらないといけない。そして歳をとるということは、決して悪い事だけじゃないと思うんですね。それはいろんな経験が、資料を読むときに生かされてくるのです。それをつくづく感じます。今日はそういう中で、今まで紹介されてこなかった資料をいくつか紹介しながら、どういうことがいえるかということをお話したいと思います。

1. 仙十郎・定一・鈴の軌跡

ご存じない方が多いと思うので、年表を使って説明したいと思います。一（配付資料、文末参照）をご覧ください。そこに杉田仙十郎・定一・鈴についての、これまでの歴史研究の傾向ということで、簡単にまとめてみました。

その一で書きましたように、これまで取り上げられてきたのは杉田定一のみでした。なぜかといいましたら、定一という人は有名な自由民権運動家でもあるし、それから衆議院議員に連続当選をし、国政の場でも活躍し、ついで衆議院議長もされた人です。もしくは、地元いろんな意味で貢献された方です。例えば九頭竜川の改修工事ですね。これは杉田家の家業といってもいい、そういう仕事だったのですが、それから三国線の敷設問題ですね。福井で定一をご存じの方は、彼のこうした地域の利益のために貢献された側面を知っておられるのだと思います。そうした研究に関しては、一のイに書きましたように池内啓・大槻弘・保科英人、こういう先生方が第一人者ですね。だから一のアにかかわる問題については、こういう方々の研究を参考にさせていただけたらと思います。

私が今日みなさま方にお話ししたいのは、二です。仙十郎と鈴については、これまでほとんど取り上げられてこなかった。中でも鈴については全く取り上げられてこなかったということです。多少おこがましいのですが、この点に関しては私がひょっとしたら最初かもしれません。

本日の私の話は、仙十郎と鈴の動向にとくに光をあてて、新しい時代を迎えた段階の豪農一家、その生き方を探れたらと思います（配付資料二）。まず仙十郎と鈴というこの二人は、私にとってはたいへん興味深い人たちです。追々詳しく話しますが、杉田家というのは、定一を含めてものすごく真面目なんです。大真面目。歴史をやっている中で、だんだんこの歳になって思うことは、大真面目な人というのは面白いですね。

これは普段から学生にもいっているのですが、大真面目な学生は見ていて面白い。ところが私の勤務先は大阪ですので、大阪あたりはそれを許さない風土があるんです。なんかちょっと面白いキャラクターの方が愛されるんです。大真面目な学生は本人が意識していなくても、ものすごく面白いですね。だから「君、その線で行け」っていうんですけどね。仙十郎、鈴それから定一自身、とくに仙十郎と鈴は生き方がものすごく真面目です。その大真面目な人たちの生き方というのは、今の我々からしたらたいへん興味深い。

この仙十郎と鈴は、全く知名度がありませんので、ここで仙十郎・鈴・定一の人生の軌跡を簡単にたどってみようと思います（配付資料五）。

文政3年（1820）、今日の話の主人公の一人である仙十郎が誕生したわけですね。それで天保9年（1838）、ちょうど18歳の時に初めて江戸に行きます。そして、どういうことがあったかはわかりませんが、仙十郎は自分の無学、自分に学問がない、ということに非常に恥じた、と後に書いています。それを恥じると同時に、藩の行政担当者、武士や僧侶の圧制を憎む言を吐いているのです。

どうしてこういうことになったか詳細はわかりませんが、福井藩の侍と僧侶、これは浄土真宗だと思われる、それを批判するようなことを書いています。資料がありませんので、これ以上は何ともいえないのですが、想像するに初めて江戸に行った時にたかられたり、侍や僧侶たちのみっともない姿を見たりすることがあったのではないかと。仙十郎は当時18歳で、すでに少年とはいえない段階にあったのですが、とにかく潔癖な人だから、侍や僧侶に対して幻滅することがあったのではないかと。これが後で話の伏線として大きな意味をもちます。

彼は、当時の豪農クラスとしてはむしろ珍しいと思いますが、侍になりたいという気持ちが全くない人間でした。それから福井の地はご存知のように浄土真宗の王国ですよ。その中であって、やがて明治期になると激しい真宗批判を展開するのですが、その伏線となった、後の仙十郎の生き方を規定する経験があったように感じます。

それから、天保14年（1843）に仙十郎は大庄屋となります。これについては、福井県立図書館がもっている資料（松平文庫）では弘化3年（1846）という記述もあります。ただ、私どもの大学が所蔵している資料では、天保14年となっております。このことを、ここで申し添えておきます。

それはともかく、弘化4年（1847）、彼が27歳になるかならないかぐらいの時に、隆^{りゅう}という女性と結婚します。ちょうど10歳下ですが、仙十郎は隆という女性をものすごく愛したようです。そうした中で、嘉永4年（1851）、ペリーがやってくるちょうど2年ほど前に定一が誕生するのです。

ところが非常にむごいことに、安政2年（1855）の6月、隆はわずか25歳という若さで亡くなるわけですね。これが仙十郎を非常に苦しめます。ものすごく苦しみ、ものすごく煩悶したようです。それだけ隆という若妻に対する思い、未練、そういうものがあったのでしょう。だから、隆もなかなか魅

力的な女性だったのだと想像はつくのですけれどね。

その時に彼は、親鸞の伝記類を一生懸命読んだらしいです。ところがどうしても自分の心にフィットするものがなかった。自分の心を落ち着かせるようなものが得られなかったようです。それで浄土真宗以外のいろんな仏教書とかその他儒教の本なども読んだようです。

その翌年、安政3年（1856）に仙十郎は杉田家の費用で学校を建設します。これは、天保9年（1838）に彼が18歳で江戸に行った時に自分が無学であるというようなことを考え、地域住民に教育を施す、住民の教育レベルを上げることが彼にとっても大きな課題として突き付けられたことと関係したようです。いずれにせよ、彼は自費で学校を建設するわけです。彼は豪農、大庄屋という地域のリーダーですからね。

ところが、これが分不相応だ、農民が学校を作るとは何事だということで蟄居処分を受けるわけです。要するに表だって活動ができなくなる、そういう処分を受けたのです。

その後、元治元年（1864）に筑波拳兵組の延命を画策します。これは井伊直弼が暗殺されて4年後のことです。京都を中心にして幕末が動乱の時代に入っていったころです。この時に筑波拳兵組というのが登場します。この頃には開国か鎖国かということで大きな問題になりますが、孝明天皇はどうしても開国にOKを出さなかったのです。

このことについて、私は機会あるごとにいうのですが、世間では誤解されているのです。孝明天皇は幕府が求めてきた開国を拒否したとどの本にも書かれているし、多くの人もそう語るのですが、孝明天皇は拒否したわけではないのです。彼自身は、開国か鎖国か、最後の最後まで悩みぬいて、けっきょく最後には攘夷的な考えを固めていくのですが、この段階において彼は開国を拒否したのではない。徳川幕府の開国要求に対し、どうしても同意できなかったのです。開国を拒否したのとそれに同意できなかったというのは全然違う。孝明天皇は幕府から世界の情勢を知らされていました。それでも彼は開国に同意できなかった。なぜか。幕末の日本人はものすごく幸せなのですよ。

日本にやってきた外国人は、日本人はとくに笑顔の庶民が多いと書いています。それからもう一つ外国人が書いているのは、侍階級が偉そうにしてないと。ヨーロッパの騎士と地域住民の関係は完全な上下関係です。だから一方的な態度で物言いをする。しかし、日本の侍は例えば道端で農民と会っても腰をかがめてあいさつをする。このことに幕末に日本にやってきた外国人は、びっくりするのですよ。ヨーロッパでは考えられない。それは何かといえば、侍も教育を受けている。農民が汗水たらして働くからこそ自分たちも生活できる。そういう教えを受けているのですよ。これは、やっぱり江戸時代の教育のすごさだと思います。だから、自分は農民だということへの仙十郎の誇りはそういうこととも関係するのです。一般的に上下関係と見られがちですけど、そんな単純なものではない。

それからもう一つ、江戸時代の日本にやってくるのは圧倒的に男性です。女性はほとんど来ないですね。そうすると大体は、日本のとくに若い女性は非常に魅力的だと書いています。日本の女性ほど魅力的な、チャーミングな女性はいないと書いていますね。

また、江戸時代の日本では衣食住全てが備わっていた。衣は着るもの、これは木綿ができます。食は山海珍味に恵まれています。海の幸も山の幸もね。それから住は家、これは木材に恵まれている。自分たちで賄えるのですよ。だから世界的に見て暮らしやすい国なのです。これは外国人にいわれる

までもなく、我々の先祖は知っていたのです。

だから、そういう中で孝明天皇は悩むのです。幕府からしたら日本国民全員が開国や鎖国に同意したというかたちを取りたかった。それで孝明天皇に同意を求めたのです。ところが孝明天皇は悩む。自分の一存で、鎖国から開国に国の体制が大きく変わる、そこで同意していかとものごく悩んだのです。それが、幕府から求められた開国要求に対して同意しなかった、反対したのではなく、同意しなかったということになるのです。ところが同意しなかったことが周りに伝わっていく中で、段々拡大解釈されていくわけです。孝明天皇は攘夷を願っている、開国に反対だ、そういうふうに読みかえられていくのです。そこからおかしくなっていく、幕末の日本が。

筑波拳兵組というのは、水戸藩の連中です。水戸藩はもともと水戸学、尊王攘夷論の自家本元みたいなところですから、そういう中で育ってきた連中が孝明天皇の意思を尊重しようということで、横浜などで外国人を襲って攘夷のさきがけをしようと立ち上がるわけですね。

そうした時に、それまで国事、政治的なことに関して立ち上がったことが一度もなかった仙十郎が初めてこの時に意思表示をするのです。どういうことかということ、攘夷実行のさきがけのために立ち上がった水戸藩の連中、藤田東湖の子どもの藤田小四郎や、あるいは武田耕雲斎、こういう人たちの生命を救うために、福井の地で海浜工事に彼らを使おうというものです。

これは農民の提案としてはありえないことですよ。つまり農民が武士を使おうという、身分制からいえば逆転の発想です。そういうことを藩に願い出て却下されてしまうのですが、後にも先にも仙十郎が国政に関して発言し行動したのはこれだけです。つまり仙十郎にとってはやむにやまれず、筑波拳兵組も日本の国のために立ち上がったのだ、そのことに対してじっとしておれないような義侠心というものをもってそうしたのだと思います。

そのあと慶応元年（1865）に、今日の話のもう一人の主人公の鈴が誕生します。だから仙十郎や定一に対して鈴はとても若い。また彼女はたいへんなエリート女性です。明治15年（1882）に東京女子師範学校、後の東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）を卒業しています。当時の女性としては最高学歴です。

そして翌年の明治16年（1883）には仙十郎が発病します。これはやっぱり60を超えて老齢になったことに伴う病気だと思います。多くの人が共感されるでしょうけれど、人間いろんな意味で歳をとるとガタがきて発病することがおきます。

実はこの年の6月に、杉田定一が澤田という京都にいる人物に手紙を送っています。杉田定一と同志社とのかかわり、要するに新島八重と鈴がのちに関わりをもつきっかけになるのは、この年なのです。その2ヶ月後の8月に新島襄が波寄村を訪れます。波寄村は定一、仙十郎の生まれ育ったところです。そこを訪れて、初めてこの段階で定一と会います。すなわち23日に定一が新島襄と連絡を取って夜遅くまで話し合ったのです。なぜ新島襄がここを訪れたかということ、大学を作るための資金提供を杉田家に期待したのです。学校を作ることはものすごくお金がかかりますから。

そういう中で、この年10月に定一は先妻を肺結核で失っています。父親と同様に奥さんを失っています。だから定一も非常に気の毒な人です。そして翌年に鈴と再婚します。若いエリート女性だった鈴と、定一は自分の親友にあたる栗原亮一という人物を介して再婚するのです。

ついで結婚した翌年（明治18年）の5月に鈴が夫になった定一に宛てて、たいへん雄渾な字で手紙を書いています。これがものすごく面白い。ガリバルディのようになることを求める書簡を送っているのです。ガリバルディというのはイタリア統一運動の英雄です。ナポレオンかガリバルディか、といわれるくらい、当時の日本人によく知られていた西洋の英雄です。鈴さんもすごいですね。自分が結婚した定一は、後でいいますが非常に英雄志向が強くて、西郷隆盛やあるいはナポレオンのような存在になりたい、ガリバルディのような存在になりたいということを、若き妻にどうもいっていたようです。そういうこともあって、夫に英雄になってほしいと叱咤激励する手紙を書いています。ものすごく雄渾な字でね。これが、最初にいいましたように私が彼女に興味をもつきっかけになった書簡です。

定一という人は、欧米の文明に対するあこがれが非常に強い人で、結婚して間もない新妻を置いて欧米に旅立ってしまいます。もちろん学問的にいうと、明治19年（1886）のこの時期は、自由民権運動が閉塞しているということはあるのですよ。これまでどなたも自由民権運動が行き詰り、状況打開のために彼は欧米に旅立ったといわれるのですが、私はもちろんそういうこともあるでしょうが、定一は少し勝手なところがあるなと思っています。

それはともかく、この辺から新島八重の話につながってきます。翌年（明治20年）2月に、遠^{とおし}という定一と鈴の長男が誕生します。だから、定一は自分の子どもの誕生を見届けずに欧米に旅立ったといえるのです。この長男はどうも病弱だったようで、この年の10月には鈴は長男を連れて京都に移ります。その表向きの理由は京都には名医がいる、だから病弱な息子の治療のために良いということで行くのです。ところが実際はそうではなくて、新島のもとで英学（イギリス学）を勉強したいという気持ちが彼女には強くあったようです。やっぱり彼女はエリート女性で時代の最先端を行きたいという気持ちがあった。そのためには理由がいろいろあるわけで、その一つが長男を名医にかけたいということ、これで仙十郎も納得するわけです。

京都に移った彼女は、なんとといっても当時としては非常な高学歴ですので、明治20年（1887）12月から同22年（1889）の9月にかけて2年弱、京都で高等小学校の訓導（教師）等を勤めるわけです。この時に新島八重と接触しています。八重という人は女紅場^{にょこうば}（後の京都で最初にできた府立第一高女、現在の府立鴨沂高校の前身）でその世話役みたいなことをやっていた。要するに八重は女子教育に携わっていたのです。その中で鈴と接触し、新島八重は夫の襄とともに随分世話をしたようです。

そして明治21年（1888）、ようやく定一が2年におよんだ長い欧米の旅を終えて帰国する。その翌々年に新島襄が神奈川で亡くなる。そしてこの年の7月、皆さんがご存じのように第1回の衆議院議員選挙が行われ、定一が当選しました。この後1回を除いて圧倒的な勝利をおさめ続け、福井が生んだ大政治家というかたちで杉田定一という人物が位置づけられることになるわけです。

実はこの頃だと思うのですが、仙十郎は真宗の本山である本願寺の僧侶を非常に痛烈に批判した手紙とかメモとかを残しています。長くなりましたが、杉田仙十郎・定一・鈴の三人がどういう人生を歩んだかということをおおむね分かっていただけたかと思います。

2. 父仙十郎と妻鈴

配付資料の二の(二)で、私は定一の活躍は父の存在なくしては成就し得なかったと書きました。これまで福井の自由民権運動の研究では、後にも先にも杉田定一ばかりです。そうした中であって、仙十郎は定一の活動を支え、そのために父祖伝来の杉田家の財産を惜しげもなく手離した人物だと強調されてきました。つまり完全に脇役です。主役は圧倒的に定一です。ところが実際に杉田仙十郎のことをたどっていきますと、脇役どころか主役だと私は思うようになったのです。定一におよぼした仙十郎の影響力はものすごく大きい。少なくとも仙十郎とセットにしないと定一という人の人生は分析できないと強く思うようになりました。

定一は極めてシンプルですが、仙十郎と鈴の方が、勢いと複雑な面白さがあります。私が資料からたどれる範囲でいうと、定一という人は弁舌がさわやかでも、機知に富んでいたわけでも、情が深くて親しみをもたれる人物でもなかった。これは悪口に聞こえるかもしれませんが、悪口ではありません。要するに、苦勞知らずの坊っちゃんなのです。

例えば、定一は第1回衆議院議員選挙に打って出ましたが、その時演説会や懇親会の開催を拒否したのです。すごい人ですよ。この当時はもちろんインターネットがあるわけではないですから、政治家が自分の考えを伝えようとしたら、演説会や懇親会しかない。それを拒否したのです。政治家としては自殺行為だと思いますよ。当然、定一の方針演説を聞くことができなかった人たちから不満の声が出る。それはそうでしょう。その批判をうけて、定一のブレンであった阿部精たちが独断で演説会や懇親会を開催して、定一の考え(方針)を伝えることをやるんですね。

それでも、なおかつ当選したのはなぜか。やはりそれは杉田家の財力、仙十郎を含めた信用だと思います。だから、とつても恵まれたポジションにいたのが杉田定一だと思います。それから、彼は若くして郷里を出て、漢学や洋学の勉強にいそしんだこともあって、実は農村の実情を知らない。福井に戻ってきて地租軽減運動をやりますが、その時に自分は農村のことを知らないから実態を教えてほしいと父親に宛てて手紙を書いているんですよ。やっぱり親父の力ってすごいと思いますね。

それから先ほど少しふれましたが、英雄豪傑にあこがれて、当初から中央志向が目立った人物なんですね(**配付資料**二の(二)のウ)。その分、地域利益の獲得に熱心ではなかった。定一は三国鉄道建設問題なんかで大きな貢献をしたじゃないかといわれるかもしれませんが、これは流れです。芦原の方々は、芦原温泉が繁栄したのは定一のおかげだと、非常にありがたく思われていますし、それは事実ですが、彼が率先して地域の利益を誘導したとは私には思えないですね。やっぱりいろんなかわりの中で、そういうことをやらざるを得ない。もちろん杉田定一にとって否定すべきことじゃなくてね、地域の利益になることは嫌じゃなかったと思いますよ。ただ、彼は仙十郎と比べたら、はるかに地域の利益獲得に対して熱心ではなかったと思います。

それから、これは非常に申し訳ないのですが、保科先生の研究などでわかるように、政党政治家としての力量、内実は乏しい。政党政治家としての実績はほとんどゼロに近い。一般論として、憲法を守らないといけないとか、そういうことをいった人ですね。そういう中で、私の定一評価は、一人の自立した政治家とみなすわけにはいかないのではないかな。だから、仙十郎の定一への影響を、薫育とか薫陶というレベルではなく、もっと大きなかわり方をしたというふうに考えています。一人の政

治家として杉田定一だけを取り上げてもおそらくいろんなことがわからないというふうには、結論としては思いました。

次に、仙十郎と鈴のことを話そうと思います。仙十郎に関して注目すべき点（**配付資料三**）として私がとくに強調しておきたいのは、耕作農民としての矜持、誇りが際立っていたということです。自分は農民である、農民といってもリーダーですね、豪農ですから。もうちょっと詳しくいいますと、農こそがあらゆる生業、なりわいの中心だという、いずれにしても、農業が立国の基本であるという思いが非常に強い人です。これについては群を抜いていた。つまり農業というのはいろんな人のなりわい、職の中で一番の基本だ、だから国を運営していくのに農業が最も基本であるというような思いが非常に強い人物ですね。

次にこれもあえて強調しておきたいのは、仙十郎の人生を見ていった時に非常に印象に残るのは、武士身分への上昇を志向した痕跡、意欲が微塵も見受けられないことです。全くないのです。これは見事だと思いました。

というのは、幕末期の非常に大きな特徴として、農民が武士身分に上昇、転化していくということが一つの流れとしてあります。例えば、新撰組の連中は百姓、農民ですよ。京都にやってきて武士身分に取り立てられていくのです。新撰組がなぜあんなに強かったかという、頭の中で侍を理想化したのです。現実の武士は大抵軟弱です。当時の資料には、武士の情けない姿がいっぱい出てきますよ。それに対して新撰組の連中は、頭の中で侍はこういうものだというのがある。とにかく人間思い込んだら強いです。だから近藤勇なんかはまさにその権化ですよ。

その中で仙十郎は、全く武士身分になろうなんて志向を見せない。これはもちろん憶測になってしまうのですが、若い10代の時に、武士や僧侶のあり方に対する幻滅があったからかもしれません。とにかく、ここまで武士身分への上昇の意欲が全くない人間、農民であるということに誇りをもった人間を私はあんまり知らないです。

それから杉田家の文書を見ているとよく出てくるもので、当時子どもたちが習っていた寺子屋の教本に出てくる言葉らしいのですが、「民ハ惟レ邦ノ本也」という言葉があります（**配付資料三の（一）のウ**）。これは、この字の通り、一般の名もなき民衆が国の本なのだという言葉です。同じ資料が何か所かに出てきます。彼は若い人たちにこういうことを書いて教えていたのか、何かの折自分の信条に合うので何回も書いたのか、ちょっとわからないのですが、少なくともこういう気持ちをもっていた。この農本主義的な考え方の延長線上に、国家は政府と人民の両者から構成されること、しかも人民が本であり政府は末だからこそ政府は人民の権利を尊重しなければならないという考え方が出てくる。これは自由民権思想です。民権思想の受容が明治になって杉田親子によって容易になされたのは、このような蓄積があったからだだと思います。つまり、明治になってから自由民権思想に触れたから、それに共鳴したのではないと思います。

杉田定一が自由民権運動に全面的に入っていたのは、やはり父親譲りのこの考え方をうけていたからでしょう。だから日本の近代は、明治以後に突然始まったものではない。江戸期の人たちの営み、こういうものから受け継がれていったと思います。ですから、私は江戸期から明治期というのは断絶があったのではなく継続面が多かったというふうに考えています。明治になってから欧米のいろんな

ものに接触したから目覚めたというのは、非常に浅い見方だと私は思うんですね。

それから、これはちょっと当たり障りがあるかもしれませんが、仙十郎は盲目的信仰から距離を置く理性の人だったと、私は考えざるを得ないです。先ほど挙げましたように、仙十郎は10代のころ、仏教勢力に対する批判心をもったようですね。何度もいいますが、なぜそうなったかということとはわからないのですが。ここでいいたいのは何かといいますと、この福井の地だけではなく江戸期にあっては、仏教は体制そのものであったということです。今の我々のように信仰の自由があって、宗教が選択できるという時代ではない。仏教は幕府からも藩からも、これ以外は信じてはいけないという宗教であり、体制そのものです。そういう中で仏教勢力に対して批判心をもつことは、体制を批判することにつながる。すごいことだ、ということをご自分で考えてほしいのです。その中で妻の死後、苦闘するなかで親鸞の教えに納得しがたいものを感じたらしいんですね。これが、**史料1**（文末参照）です。

これは非常に短いですが、明治になってから書かれたものでしょうか。「忌中中ニ親鸞之伝鈔読書を以、夢或ハ化身」、これは神仏が夢に現れることらしいのですが、「一向信シ難クニ付、諸山諸寺、其上何様之窮理学」、窮理学というのは物事の本質を究めるという学問らしいんですが、「理化学ニ而も、誠ガ専要ト存」云々と書いています。

簡単な表現ですが、先妻が亡くなった時に非常に苦しかったのでしょうか。それで取り敢えず、福井の地ですから、親鸞の伝記なんかを読んだりして、自分の苦しみを何とか紛らわそうとした。ところがどうしても、若き妻を失った自分の悩みに、こういったものが答えてくれなかったのでしょうか。これには、仏教が体制そのものであった中で安住していた面があると思いますね。今の仏教にも突き付けられている問題ではないかと思います。つまり我々の心の悩みに必ずしも応えきれていない。仙十郎にとっては妻の死後、親鸞の教えに納得しがたいものを感じたらしい。福井は蓮如上人以来、浄土真宗が根を下ろした浄土真宗王国ですが、こうしたこともあって、どうも仙十郎は幕末期以来、支配体制を支えるイデオロギーである浄土真宗から距離を置くようになったらしいです。もちろん、仏教に対する明らかな批判はしない。地域のリーダーとして、そういうことをすれば危ないぐらいはわかっていますから、おさえていたのですね。

これに関連して、最近ある言葉を知って面白かったのは、水戸の徳川斉昭の側近で藤田東湖という人物の言葉です。東湖は幕末期においてたいへんな人気者です。そして徳川斉昭とその側近の藤田東湖を、仙十郎はものすごく敬愛していました。私は今まで仙十郎が彼らを敬愛していたのは、尊王攘夷運動に対する共感によるかなと思っていました。斉昭も東湖も幕末の尊王攘夷運動、いわゆる外国人を日本から追い出せという運動のカリスマ的な存在です。それだろうと思っていました。

ところがつい最近資料を読んでいましたら、こんなエピソードが出てきたのです。それは、斉昭が酒席で東湖に「おまえ何か和歌を歌え」といった時に、東湖が、私は無骨な人間で歌なんて歌えませんと断ったのですが、斉昭もしつこい男で、作れという。その時東湖が困ってこういう歌を歌ったようです。「大嫌い 仏坊主 さつまいも のらくらものに利口ぶる人」と。これはどういう意味かというと、私が大嫌いなものは、僧侶、さつまいも、それから働かないでぶらぶらしている人間、利口ぶる人間、だと。この言葉を見た時に、仙十郎の徳川斉昭、藤田東湖に対する敬愛の中に、こういう反仏教の思想があるのではないかと思ったんですよ。斉昭が仏教嫌いということは当時から有名です

から。若い時は単に尊王攘夷運動に共感して斉昭とか東湖を敬愛したとしか受け取れなかったのですが、この歳になっていろいろ経験すると、こういう読み方もできるなと思いました。最初にいいました資料を読んでいて面白いというのは、こういう発見があるからなのです。

こういう中で仙十郎はいち早くキリスト教を是認し、西洋文明を受け入れることを表明します（**配付資料三**の（二）のオ）。これは、当時にあつては、絶対的な宗教権威に対する相対的な視点を確立したかった、もしくは信仰の自由を日本で最初に確立しかかったという点で、近代の入口に立ったといえるのではないかと思います。

個人の自立ということであれば、立憲制では信仰の自由を憲法で保障しているわけですね。そういう点で個人の自立が立憲制の基礎だというふうに民権運動ではいうわけです。だから民権運動では、憲法の制定を求めていく。帝国議会の開設と、立憲制の導入ということを自由民権運動を推進する人たちは主張する。そういう面で行くと、仙十郎が息子を通して、民権運動を受け入れていくことにつながっていった。こういう点でも明治になってから急に民権運動を杉田親子が受け入れたのではなくて、江戸期以来のつながりがやはりあったと思います。ただ、この点を強調すると仙十郎がキリスト教徒になったと勘違いされるのですが、彼はなりません。キリスト教徒にはなりません。

それでは次に**配付資料三**の（三）のアをみてください。あくまでも、彼が終生心の糧にしたのは儒学です。仙十郎は儒学に心を寄せた人物です。幕末期にあつて、大真面目に孔子の教えを地域住民に広めることを決意して、学校を作ろうとしました。主に、儒学が説く「誠」を重視する精神を地域住民の柱とすべく努めるようになった。「誠」というのは我々が考える誠実さという以上に大きな意味をもっていたと私は思います。「誠」とは、単に人間の心のあり方のみを問題にしたものではないということです。人間、とくに農民が自然界、天地と向き合う際の姿勢にかかわるものであった。仙十郎が考えている「誠」とは何かというと、要するに、農作業をきちんと誠実にやりなさいということです。ちゃんと土地には手入れをし、肥料をやり、水が不足した時には水をちゃんとやる。そうすると、自然は裏切らない。こちらが農民としてきちんとした態度で、汗水を厭わないで向き合うと、それなりにちゃんとした収穫物を我々にもたらしてくれる。それが人に対しても誠実であれということになってくるのだと思います。我々が口先だけでいう、誠実に生きなさいということだけでなく、もっと大きな面で「誠」というのをとらえていたと思います。

次に、仙十郎は地域の利害を直視して、その解決を最優先することを課題として生きた人物であったと思います（**配付資料三**の（四））。これも、仙十郎のことを調べている中で面白かったので紹介するのですが、国学、とくに平田派の国学を学び、尊王攘夷運動に参加した地域リーダーではないということです。ご存知の方がおられるかもしれませんが、幕末期の民衆史という場合、判で押したように、一つの見方が有力です。それは何かといいますと、幕末になぜ幕府支配が終わったのか、幕府がなぜ倒されたのかを、民衆の視点から見ていった時によくいわれるのが、各地にいた平田派の国学を学んだ豪農クラスが尊王攘夷運動に加わっていったことです。皆さん、そういうイメージをもつのですが、私はそうではない。圧倒的に多かったのは、そういう人たちではない。平田派の国学云々ではなく、尊王攘夷運動とも関係なく、地域のことを思って生きた各地の豪農たち、このほうが圧倒的に多かったと思います。どうも見てみると、豪農クラスで平田派の国学にはしったという人間は少ない

ですよ。それよりも神官ですね。神官が国学を勉強して、尊王攘夷運動に馳せ参ずるというケースが多いと思いますね。研究者にはこういうふうにとらえたほうが面白いからというのがあられるのでしょうけど、どうも行きすぎの面があるような気がします。

それから、大きな研究としては、文化的ネットワークから見ていくというのがあります。つまり豪農たちが、同じ国学、平田派の国学の会に参加して、文化的・人的なネットワークを形成してそこでつながっていったという面が強調されますが、仙十郎はそういう人ではない。非常に孤独な感じがします。その性格が、定一にもつながったと思いますね。ただ、一度だけ国事につながるような行動を起こしたのが、先にいいました筑波拳兵組を彼が救済しようとして藩に延命を働きかけて失敗した事例です。

さらに**配付資料三**の(四)のエで書いたのですが、国事行為に立ち上がった者への仙十郎の共感のあり方が、息子の定一にも受け継がれて、定一の後年の活動につながったのではないかと思います。だから、定一という人だけを見ているとこういうことは分からない。親子二代の流れの中で見ていてこそ非常によく理解できると思います。

杉田定一は西南戦争の時に、西郷軍に参加しようとしています。ついでにいいますが、西南戦争前の西郷隆盛は若い青年たちからものすごく人気がありました。私は、西郷がけっして嫌いではなくて、西郷に関する専門書を2年ほど前に出したほどですが、そこに詳しく書きました。西郷は決して器が大きいというタイプではないです。ものすごく好き嫌いが激しいですしね、人間臭い人です。それはさておき、定一は西郷に憧れて西郷軍に投じようとしています。それから、民権運動にももちろん関係します。こういったところが、やはり仙十郎、親父さんの遺伝子、生き方を受けついたのであると思いますね。

次に、仙十郎自身はほとんど政治活動には従事しませんでした(**配付資料三**の(五))。これは、一つはアとして挙げましたように、仙十郎は自分たちの生命と家の存続を統治者にまず期待するという、当時の人びとにとってはごく普通だったんですが、仁政イデオロギーを前提に生きた人です。つまり、仙十郎は藩に対して仁の心(温かい心)をもって民衆を保護してくれるのをまず期待した豪農です。

それと同時に、同じ理由によるのですが、徳川家康に対する敬愛の念が非常に強い。これもついでにいいますと、この頃の資料を見ていると、江戸期の人間というのは徳川家康に対する評価が高いです。これは幕末あたりでも幕府に対して反抗的な連中でも、不思議なことですが、徳川家康に対してだけは評価が高い。なぜかといいましたら、これは徳川政権の実績に対する評価なのですね(**配付資料三**の(五)のア)。要するに、300年近くにおよび長期政権を保ち、民に一定レベルの安寧秩序を保障してきた、その体制の創始者ということです。だから、家康の評価が非常に高いということ、最近いろんな資料を見る中で改めて感じています。仙十郎も徳川家康に対する憧れを綴った言葉を残しています。家康が始めた徳川政権に対して、抵抗する、反抗するということがなかったのは当然ですね。

それから、あえていいますが、いま挙げたような考え方は仙十郎の歴史観・自然観によったといえるかと思います。**史料3**を読む時間がなくなってしまうので簡単にふれますと、まず、天地自然への絶対的な信頼があります。つまり、我々が誠実に向き合えば、天地自然は裏切らない、この思いが非常に強い。これは今の我々の地球温暖化の問題にもつながってくるのではないですかね。自然

も人も移り変わっていくことで、腐敗や墮落を防ぎ、成長発展を遂げるということが可能になるという考え方。これは非常に大事な考え方だと思いますね。自然も人も、その時代に応じてあり方が移り変わっていくことで、腐敗とか墮落を防げる、成長発展を遂げるができるのだという、つまり、保守的ではないのですよ。何が何でも徳川にしがみつくといいことではない。このような「天運」感が徳川の体制の存続を認めさせたし、次いで、やがてその徳川幕府の支配が終わっていくということをも認めさせた。すなわち、近代天皇制国家の登場を認めさせていった。そこにあるのは、柔らかな発想ですね。

同時にキリスト教を是認していったのもそういう発想ですね。これはキリスト教の是認に直接関係する資料ではないのですが、新島襄・八重に関係するので、**史料4**を見ていただけますか。これは、彼の怒り、仏教に対する憎しみが晩年強くあったということに関係しています。仙十郎は最晩年になって同志社の建物の天井が崩れ落ちたことを知った際に、定一・鈴に対して次のような自分の気持ちを伝え、正確な情報を伝えるように依頼しました。明治22年（1889）5月23日付で、息子夫婦に宛てた手紙の中で、「此儀」（同志社の建物の天井が崩れ落ちたこと）に「付而ハ自分モ出京致度」（京都に行きたい）、次がすごいんですね、「本願寺之坊主トハ違ヒ、何分新嶋大先生之方ニ天井之落ル様ナ事有之候而ハ^{こま}込入り候」と。

面白いでしょう。大先生なんていい方はよく馬鹿にしていることがあるでしょう。例えば私なんか大先生なんていわれたら怒りますよ。こいつ馬鹿にしているなど。大真面目な仙十郎は本当に尊敬した人にしか大先生とはいわない。仙十郎は、福井にも関係する横井小楠に対しても横井大先生と書いています。これは、私にとっては面白かったですね。私は浄土真宗に対してむろん敵意をもっていません。これだけはいっておきますね。そうじゃなくて、こういう表現にむしろ人間の生の心が出るのですよ。これはまことに厳しい真宗批判だし、ここまで仙十郎を追い込んだのは、何かなと思います。

3. 新島夫妻とのかかわり

なかなか新島八重が出てこないです。このまま終わると文書館の方に怒られてしまうので、ちょっと挙げますね。定一・鈴夫婦に関して注目すべき点ということで、これも面白かったので紹介します（**配付資料四**）。

杉田定一の政党論・選挙権資格論というものがあります。これはどんなものかという、財産と教育のある有産者からなる政党による政治を理想としたものです。つまり、金持ちだけが政党に加われよということです。この論には現在では多くの人が違和感を持ちますよね。すなわち政党员や内閣構成員、大臣は、私益に惑わされることのない財産家によって構成されるべきだと。ものすごいことを書いているのです。これは普通選挙を否定しかねない発想です。杉田家はエリートですからね。けれども、ある種の面白さがあるのですよ。今、TPPの問題なんかを見ると、私的な欲求のぶつかりあいです。それを万遍なく取り入れるために政治家をやっているようなものです。でも定一のこの考え方はすごいじゃないですか。貧乏人は政治家になるな、大臣になるなということですから。

これは、まさに仙十郎の生き方そのものです。杉田家は仙十郎、定一の代で財産を全部投げ出した。要するに、杉田親子は、国のため、地域の人民のためを思う人間が、金を全部出してやるのが政治だ

と言った。杉田家の人間しかいえないことですね。つまり、国会議員としての金で生活するとか選挙をすることかという発想ではない。私には、むげに否定できないある種の面白さがあると思いますね。

次にようやく八重のことが出てきます。まず定一・鈴に共通するものを挙げてみました。自立的ないし志士的精神の持ち主というのがそれです。そして、新島八重と鈴の兩人に共通しているのもこれだと思えます。この二人の自立精神はすごいです。さらに鈴と八重に共通する点は、ものすごく個性的だということですね。

それとあえていいます。まだどなたもいってないと思いますが、新島八重と杉田鈴という二人の女性に共通しているのは、夫が妻の常識破りの面白さを認めたことです。二人とも個性的な女性ですけど、とくに新島八重という人は、自分の旦那をジョーというようないい方をしていたらしいですね。有名な話です。反対に、新島襄という人は奥さんに非常に丁寧に敬語を使って接していたらしいですね。

ついでにいいますと、慶応義塾の創立者の福沢諭吉。私は大分の生まれなので、いってみれば郷土の大先輩です。福沢諭吉と新島襄の能力を比べたら断トツに諭吉のほうが上です。けれども教育者としては、私の知っている範囲では新島襄はすごいなと思えます。私も教育者のはしりだからいのですが、新島襄の教え子というのは有名になった人物が多い。例えば安部磯雄などはその一人です。その連中が晩年になって功成り名を挙げてから書いていることは、あの世で新島先生に会った時に、君よく頑張ったな、それをいってほしいがために頑張ってきたのだと。それを思い起こすたびに涙が出てくるのですよ、いつも。すごいなと思えます。なかなかこんなこと言ってもらえないですよ。普通の教育者ではね。

その新島襄ですが、「八重さん」と呼んでいたらしいです。新島襄と杉田定一に共通するのは、嫁さんの面白さに初めて気がついた人間だということじゃないですか。個性のある女性の面白さに気がついた、最も早い頃の日本の男子だと思います。定一も鈴という女性の面白さに気がついたのではないですか。私はそういう点で二人に共通項があると思えます。

杉田定一は新島襄にすごく親近感をもっています。ヨーロッパからの手紙で妻の件でありがとうと書いて送っています。しかも、すごくフランクな調子です。

キリスト教の是認から新島襄・八重との交流を受けて、ようやく最後になります。杉田鈴と新島八重が間違いなく交流をもったと考えられるのは、英国留学中の息子の定一へ宛てた父親の杉田仙十郎の書簡（明治20年（1887）10月16日付け）によってです（史料5）。

その冒頭、鈴らが京都に行ったことを報告したあとの傍線を引いたところを見てください。「新嶋氏非常ニ鈴之儀ヲ御配慮被下候由」、要するに新島襄が自分にとって嫁に当たる鈴に対して、非常に気を遣ってくれている、これについては鈴から仙十郎に対して手紙が来ているはずなんですね。「同志社江月給拾円、無月謝ニ而英学研究可致旨、府会議員大澤与申人ヲ以テ申入候得共」とあり、どうも新島襄は、杉田鈴は能力があると思ったのでしょうね。月給10円出すから教えに来ないか、それと「英学」を勉強するための月謝はいらないと。これは鈴が希望したことでもあります。2行ほど空いて「新嶋ノ夫婦」（新島襄と八重）「誠ニ親切ナル事ニ付、宅分（自宅より）礼状出シ呉トノ事」と。鈴が義理の父に当たる仙十郎に対して、新島夫婦が自分に親切にしてくれているのでどうかお義父さ

んの方からもお礼の手紙を出してほしいということです。これによって、詳細はわかりませんが、鈴が新島八重から大事にされていたということがわかります。

それで、問題になるのはこういう中で鈴は新島襄の崇拜者になっていくわけですね（史料7）。ところがそれが、浄土真宗の非常に強い福井の地で定一が選挙に出るにあたって障害になるわけです。もちろんキリスト教が耶蘇と呼ばれて邪教視されていた頃ですから。尊王奉仏大同団という、キリスト教を敵視する宗教団体があるのですが、そういうところから攻撃がくるのです。これはなんとかしないといけないということで、定一のブレーンであった人物が定一に訴える。

「杉田氏カ令閨（鈴）ハ新島先生ヲ尊拝ナル事ハ世ニ知ラザルモノナシ」、このように鈴は新島襄を相当信奉しておったのでしょね。「故ニ令閨カ大同団ニ加盟シ併セテ杉田氏カ賛成員ノ一人トナラサルトキハ、名望在ル僧家申合セ、来ル五月中旬后ヨリ六月中旬ニ掛ケテ不意ニ討テ出、其撰ヲ奪ハントスル決心ナリト」とは、杉田鈴が新島襄を信奉している、これを放っておいたらキリスト教が福井の地でも広がることになりかねないということで、仏教勢力のほうから杉田定一の選挙妨害に出る、そういう動きがあるといっています。それで「素ヨリ僧家カ運動位ハ取ルニ足ラザルモノ、如シト雖トモ、撰挙者其人ハ概ネ仏信家ニシテ、僧侶ヲ崇ムル事恰モ活仏ノ如キ民度ナレハ失敗モ難計見込ニ御座候、之レニ依テ生カ数タノ見込ヲ立シハ兎モ角令閨カ大同団ニ加盟スル事トナシ、兄（定一）モ賛成員トナルヲ以得策ナラン」と。定一のブレーンはまことに現実的な提案をしたのです。つまり杉田夫婦がキリスト教徒ではない、仏教徒であるということを改めて表明する、そのために鈴がキリスト教を敵視する団体に入って、定一もこれを支持すると表明しなければいけないと。

いろんなことがあって鈴さんは夫の第1回の選挙に差し障りがあるのは困るということで、どうもこの団体に入ったようです。そして、めでたく杉田定一が第1回の総選挙で大量得票して衆議院議員になっていくわけですね。

この後、杉田家文書にはキリスト教は一切出てこないです。ただ、その中で鈴がその後どうなったかといいますと、彼女はこういう動きに心の底から同調したのではどうやらないですね。そのことがよくわかるのは、東京に移ったあとで、彼女と定一との間にできた息子二人をとにもある学校に通わせていることです。それは明治学院なのです。明治学院というのはもちろんキリスト教の学校です。鳥崎藤村が出た学校です。私はこういうところに杉田鈴はいったん押さえつけられたが、若かりし頃のキリスト教信仰、英学、欧米文明に対する憧れといったものがかたちを変えて出ていると思います。ただ当時のことですから、杉田鈴はその後、歴史の表舞台から消えていくのですけれどね。

とりとめない話になってしまいましたけれども、この福井の地で今から100年ほど前に、非常に大真面目に新しい時代と向き合った三人の人物がいたということ、とくにその中の二人はほとんど知られていなかったということで、紹介がてらこういう人たちがいたんだということでお話をしました。これでお許しください。ご静聴どうもありがとうございました（拍手）。

配付資料

一 杉田仙十郎・定一・鈴についての歴史研究の傾向

(一) 取り上げられてきたのは、最近まで杉田定一のみであった

- ア 定一の自由民権運動および衆議院議員としての活動、あるいは九頭竜川改修や三国線の敷設問題との関わり方等々
- イ 池内啓・大槻弘・保科英人氏の研究
- (二) 仙十郎と鈴については、これまで、ほとんど取り上げられてこなかった（なかでも鈴については全く取り上げられてこなかった）

二 本日の私の話（仙十郎と鈴の動向にとくに光をあてて、新しい時代を迎えた段階の豪農一家の生き方を探る）

〔理由〕

- (一) 仙十郎と鈴（大変興味深い人物）
- (二) 定一の活動は父の存在なくしては成就しえなかった
 - ア 従来の研究（仙十郎は、定一の活動を支え、そのためには父祖伝来の杉田家の財産を惜しげもなく手離れた人物だと強調。つまり完全に脇役として扱われる）
 - イ 実際の仙十郎（脇役どころか主役。定一に及ぼした仙十郎の影響力には極めて大きなものがある。したがって、両者はセットにして把握しなければならない）
 - ウ 定一の個性・志向・力量
 - a 弁舌が爽やかでも機知に富んでいたわけでも、情が深くて親しみをもたれる人物でもなかった
第一回衆議院議員選挙に打って出るにあたって、「演説会」「懇親会」を拒否→定一の方針演説を聴くことが出来ず不満の声があがる→ブレインの判断で「演説会」「懇親会」が開催されることになる
 - b 若くして郷里を出て漢学や洋学の勉強にいそしんだこともあって、農村の実情に疎か^{うと}かった
 - c 英雄豪傑^{あこが}に憧れ、当初から中央志向が目立った。その分、地域利益の獲得に熱心ではなかった
 - d 政党政治家としての力量・内実は乏しい（政党政治家としての実績は、ゼロに近い人物であった）

↓

- (三) 私の定一評価（一人の自立した政治家と見なすわけにはいかない。仙十郎の定一への影響を薫育・薫陶のレベルとは評しえない）

三 仙十郎に関して注目すべき点

- (一) 耕作農民としての矜持^{きんぢ}の念が際立っていた
 - ア 農こそあらゆる生業の中心だ（農業が立国の基本である）との思いが強かった
 - ↓
 - イ 武士身分への上昇を志向した痕跡（意欲）は微塵も見受けられない
 - ↓
 - ウ 仙十郎は寺子屋教本から「民ハ惟レ邦ノ本也」という言葉を何度も書き写している
 - ↓
 - エ この農本主義的な考え方の延長線上に、国家は政府と人民の両者から構成されること、しかも人民が本であり政府は末だからこそ政府は人民の権利を尊重しなければならないとする民権思想の受容が、後年杉田父子にあって容易になされた
- (二) 盲目的信仰から距離を置く理性の人であった
 - ア 十代の頃（仏教勢力に対する批判心が生じる？）
 - ↓
 - イ 妻の死後、苦闘する中、親鸞の教えに納得しがたいものを感じたらしい（史料1）
 - a 福井（蓮如以来、浄土真宗が深く根をおろした浄土真宗王国）
 - b 浄土真宗（江戸期にあっては幕藩権力と強く結びついていた）
 - ↓
 - ウ 幕末期（支配体制を支えるイデオロギーである浄土真宗から距離を置くようになった）

↓

エ 明治期（仏教勢力に対する不満を爆発させ、痛罵するに至る）

↓

オ キリスト教の是認（西洋文明の柔軟な受容）

a 絶対的な宗教権威に対する相対的な視点（信仰の自由）を確立しなかったという点で、近代の入口に立ったと評しうる

b 個人の自立が立憲制の基礎だとした民権運動の受容にもつながった

(三) 儒学に心を寄せた人物

ア 幕末期にあって、孔子の教えを地域住民に広めることを決意

イ 主に儒学が説く「誠」を重視する精神を、地域住民の心の柱とすべく努めるようになった

ウ 「誠」とは、たんに人間の心の在り方のみを問題にしたものではない。人間（とくに農民）が自然界（天地）と向き合う際の姿勢にかかわるものであった（史料2）

(四) 地域の利害を直視し、その解決を最優先することを課題として生きた人物

ア 国学（とくに平田国学）を学び、尊王攘夷運動に参加した地域リーダーではない

イ 文化的ネットワークを形成し、他地域のリーダーと関わりを持った人物でもない

ウ ただし、一度だけ、国事につながる問題で行動を起こした（元治元年に筑波拳兵組の延命を画策）

↓

エ 国事行為に立ち上がった者への仙十郎の共感の在り方が息子の定一にも受け継がれ、定一の後年の活動につながった

a 西南戦争（一八七七年）に参加しようとした動き

b 民権活動

(五) 政治活動に参加しなかった（反体制的な考え方の持ち主とさせなかった）背景

ア 仙十郎（生命と家の存続を統治者にまず期待するという仁政イデオロギーを前提に生きた）

a 徳川家康に対する敬愛の念

b 徳川政権の実績に対する評価（三百年近くに及ぶ長期政権を保ち、民に一定レベルの安寧秩序を保障してきた）

イ 仙十郎の歴史観・自然観による（史料3）

a 天地自然への絶対的な信頼→b 自然も人も移り変わっていくことで腐敗や墮落を防ぎ、成長発展を遂げることが可能になるとの思い→c このような「天運」観が徳川の体制の存続を、ついでその消滅と近代天皇制国家の登場（すなわち明治維新）を肯定させた

(六) キリスト教の是認（史料4）

四 定一・鈴夫婦に関して注目すべき点

(一) 定一の政党論・選挙権資格論（財産と教育のある有産者から成る政党による政治を理想とした。すなわち、政党员や内閣構成員は、私益に惑わされることの無い財産家によって構成されるべきだと考える）

(二) 定一・鈴の二人に共通するもの

ア 自立的ないしは志士的精神の持ち主

イ 欧米文明に対する強い憧れ（西洋文明の積極的な肯定）

ウ キリスト教の是認（新島襄・八重との交流）（史料5）

五 仙十郎・定一・鈴の人生の軌跡

文政三年（一八二〇） 仙十郎（誕生）

天保九年（一八三八） 仙十郎（初めて江戸へ行く。そして、自分の無学を恥じると同時に、藩の行政担当者と並んで僧侶の圧制を憎む言を吐く）

天保十四年（一八四三）		仙十郎（大庄屋となる）＊「御国在方」（松平文庫）には弘化三年（一八四六）とあり
弘化四年（一八四七）	二月	仙十郎（隆と結婚）
嘉永四年（一八五一）	六月	定一（誕生）
安政二年（一八五五）	九月	隆（二五歳で死去）→仙十郎（苦闘の時期を過ごす）
安政三年（一八五六）		仙十郎（自費で学校を建設）
安政四年（一八五七）	五月	仙十郎（蟄居処分を受ける）
元治元年（一八六四）		仙十郎（筑波拳兵組の延命を画策）
慶応元年（一八六五）	五月	鈴（誕生）
明治十五年（一八八二）	七月	鈴（東京女子師範学校を卒業）
明治十六年（一八八三）	一月	仙十郎（発病）
明治十六年	六月	定一宛澤田書簡（史料6）
明治十六年	八月	新島襄（二十三日に定一と会い夜遅くまで話し合う）
明治十六年	十月	定一（妻の都香を肺結核で喪う）
明治十七年（一八八四）	七月	定一（鈴と再婚）
明治十八年（一八八五）	五月	鈴（定一に宛ててガリバルデイのようになることを求める書簡を送る）
明治十九年（一八八六）	七月	定一（欧米に旅立つ）
明治二十年（一八八七）	二月	遠（定一・鈴の長男。誕生）
明治二十年	十月	鈴・遠（京都へ移住）→明治二十年の十二月から二十二年の九月にかけて、鈴は京都で高等小学校の訓導を勤める
明治二十一年（一八八八）	六月	定一（帰国）
明治二十三年（一八九〇）	一月	新島襄（死去）
明治二十三年	四月	阿部精（定一に、鈴が新島を「尊拝」していることが選挙に不利になっているとの書簡を送る）（史料7）
明治二十三年	七月	第一回衆議院議員選挙（定一の圧倒的な勝利）
明治二十年代前半頃？		仙十郎（浄土真宗の本山である本願寺の僧侶を痛烈に批判）

史料

1
忌中中ニ親鸞之伝鈔読書を以、夢或ハ化身一向信シ難クニ付、諸山諸寺、其上何様之窮理学・理化学ニ而も、誠ガ専要ト存

化之徳、其徳ヲ知り人ノ誠ヲ以テ世界安穩ニ治ルハ当然候、名実不相当之類月ニ百度之変格有之筈、尚正敷身ノ養生致シ長寿専要、呉々目的之巨細書承り度

越前坂井郡波寄村

父 杉田仙十郎

明治元辰年十二月十四日

東京下谷美倉橋通大病院横

元酒井左エ門屋敷三寄熟（塾）ニテ

杉田定一殿

2
何分ニも天地ハ人力之誠を尽し候を御待被成候与愚案ニ奉存上候へハ、人心一図ニ其身之分限正道ニ相成候得ハ、御田地之儀者自然と速ニ古田ニ復古致し、安心之場ニ相運候儀ハ眼前ニ御坐候

4

仙十郎は、最晩年にあつて、同志社の建物の天井が崩れ落ちたとの情報入手した際、定一・鈴の夫婦に対し、次のような自分の気持ちを伝え、正確な情報を知ら

3
四季地水火風五味五色草木之成長替ル事ナキハ天地之造

せるようにと依頼した（一八八九〔明治二十二〕年五月二十三日付書簡「此義付而ハ自分モ出京致度（中略）本願寺之坊主トハ違ヒ、何分新嶋大先生之方ニ天井之落ル様ナ事有之候而ハ込入り候」。

5【英国滞在中の定一へ杉田家近況などを知らせる書簡】

（明治20・1887） 028-136-008-001

十月十六日鈴、遠・守・りつ以三人出立致シ、和ニ困ツタデ、却テ西京ニハ大医有之、遠ノ養育方宜シカロウト存思イ切、鈴文部大臣江面会致シ候由ニ而、御請書、杉田鈴任京都府下京区高等小学校訓導、但上級十等俸支給、明治二拾年十二月二日、右謹テ御請仕候、京都府知事北垣国道殿、鈴住所西京下京区新門前通り大和大路東江入西ノ町三拾四番地鎌田せい方寄宿、遠ハ先達而少々不快ニ付半井仲庵ノ大医一度之薬ニ而全快、日々々成長、新嶋氏非常ニ鈴之儀ヲ御配慮被下候由、同志社江月給拾円、無月謝ニ而英学研究可致旨、府會議員大澤与申人ヲ以テ申入候得共、又大沢之夫婦ト藤田愛爾相談致候処、高等小学校ニ半ヶ年ナリ一ヶ年ナリ勤候上ニ而無之候半而ハ、人ノ信仰ヲ失ヒ候而ハ不宜候間、先ツ一旦勤候上ニ而ノ事ニ致度、新嶋ノ夫婦誠ニ親切ナル事ニ付、宅ハ礼状出シ呉トノ事、米・諸品物産改良共進会所々ニ有之、強欲姦佞、貧慾薄情、尸位素餐、遊逸安惰、賭博公事訴訟誠ニ盛也、

6【同志社暑中休暇中にて開校を待つ旨書簡】

（明治16・1883） 014-009-007-001

益御清穆奉至賀候、陳者予テ御請嘱ノ件ニ付、本日同志社ニ罷越シ候処、該社ハ即今暑中休暇ニテ休校致シ、且教員・幹事ハ布教ノ為メ他出致居リ万事相談ノ路無之、依テ開校ヲ俟チ委曲御報導可申上候間、此段御了知被下度、尚窮愁一適池松・中江ノ批評ハ未タ到着不仕哉、御序手ノ節御報導被下度、頓首

六月 日

澤田鮎来

杉田先生

追而、御尊父様ニモ宜敷奉願上候

7【尊皇奉仏大同団への対応など第二選挙区の状況報告】

（明治23・1890） 030-030-001

尤兄カ大敵ノ生セントスルハ例ノ尊皇奉仏大同団是ナリ、故ニ此実ヲ探リ得ルニハ此内陣ニ入ラザルヲ得ズ、茲ヲ以テ過日僧侶盤君月光師ノ發起セントスル哲信会ナルモノヘ充分ノ寄付金ヲ投シ、之レヨリ僧侶輩ニ近クノ機ヲ得タルヲ以テ内実取調ヲ為シタルニ、杉田氏カ令閩ハ新嶋先生ヲ尊拝ナル事ハ世ニ知ラザルモノナシ、故ニ令閩カ大同団ニ加盟シ併セテ杉田氏カ賛成員ノ一人トナラサルトキハ、名望在ル僧家申合セ、来ル五月中旬后ヨリ六月中旬へ掛ケテ不意ニ討テ出、其撰ヲ奪ハントスル決心ナリト、又本月廿日福井新聞社主筆カ論説ノ予見ニモ明載セリ、生ハ何トカシテ邪僧輩カ運動セントスルヲ未発ニ予防セントスル精神切ニシテ一兩輩ノ僧家ヲ引込ミ、兄カ爾后決シテ仏敵ノ意想非ル事ヲ要路ノ僧家ニ知ラシムルカ肝要ナリト被存候故、丸岡正善寺住職舎弟浅田滄溟ニ相語ヒタルニ、同氏ノ曰ク、南越七郡ニ係ル僧侶輩ヲ左右セシムル名望家ト云フハ今立郡四方谷村正覚寺住職ニシテ、以前ハ普通教校幹事長ノ位地ニ在リシ、当下ハ時機至ツテ意外ノ大敵カ顕レルハ疑ヒヲ容レザルニ在リトノ事、素ヨリ僧家カ運動位ハ取ルニ足ラザルモノ、如シト雖トモ、撰挙者其人ハ概ニ仏信家ニシテ、僧侶ヲ崇ムル事恰モ活仏ノ如キ民度ナレハ失敗モ難計見込ニ御坐候、之レニ依テ生カ数タノ見込ヲ立シハ兎モ角モ令閩カ大同団ニ加盟スル事トナシ、兄モ賛成員トナルヲ以テ得策ナラン、若シ賛成員トナルヲ得ザル事情アラハ兄カ意中ヲ明言スル方肝要ニ御坐候、故ニ帰県ノ際ニハ是非々々京都下京油小路御通下ル海外宣教会カ又ハ下京油ノ小路玉本町開明新報社方ニ就キ里見了念氏ヲ御訪問アリテ、十余分ノ御懇談相成候テ可然哉ニ被存候、（中略）

一御不在中ト否ヲ問ズ令閩カ大同団へ入員スル事ハ本人ノ承諾ナレハ兄ニ於テ差支ナキカ如何、是又御決報、入団承諾ナレハ岡部・久保両氏ニ謀リ入団取計候積リ、是又返報延引スル勿レ

〔付記〕本稿は2013年（平成25）3月2日に、福井県立図書館多目的ホールで行なわれた講演会「豪農一家にとっての近代－杉田仙十郎と定一夫妻－」の講演録を加筆・修正したものです。